

7. 求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。
8. だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。
9. あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。
10. また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。
11. してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。
12. それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。

説教

これはイエスさまの山上の説教の一節です。

7章に於いて、イエスさまは、まず、人を「さばいてはいけません」と教えます(7:1)。そして、人の目から「ちり」を取り除いてあげようとするれば、まずは自分の目にある太い角材「梁」を取りのけるよう教えます(5)。そして、その上で「豚に真珠は禁物」と教えました(6)。すなわち、神の国の真理を人に教える時には、まずは人をさばかず、次に、自分の目の中にある「梁」を取りのけながら教えるのですが、そうまでしても相手が理解しない、あるいは理解しようとしめない場合には、もうそれ以上教える必要はないと言うのです。なぜなら、そこまでしても真理を理解しないその相手は、もはや人間ではなく「犬」「豚」に過ぎないからです。「犬」「豚」ですから、地上のことしか関心が無く、霊的なこと、天上のことを理解しません。日夜ひたすら自分の欲の追求に明け暮れるだけで、汚れた生ゴミと死骸をガツガツと食いあさり、何が真に価値ある「聖なるもの」「真珠」なのかを死ぬまで理解しません。こうして、イエスさまの教えは、恐ろしい事実を私たちに伝えていきます。すなわち、神のことばを聞く耳の無い者は、もはや「人間」の姿を失って、「犬」「豚」に成り下がっているという事実です。

もともと人は神のかたちで造られましたが、悪魔は人を「犬」「豚」にします。悪魔に惑わされて「犬」「豚」に成り下がってしまった人間は、神のことばを嘲り、蔑み、「足で踏みにじり」ます。そして、あからさまに憎悪して、神のことばを無きものにせんと挑みかかってくるのです(6)。どんなに努力しても、このような「犬」「豚」に私たちが真理を悟らせることは不可能です。イエスさまの教えの通り、「聖なるものを犬に与えない」、「豚の前に真珠を投げない」、これが私たちのなし得る最善です。

それでは、私たちはどうしたらいいのでしょうか。悪魔の惑わしの中で神と真理を見失っている同胞の救いを私たちは永遠に諦めなければならないのでしょうか。よく読むと、イエスさまはそうは言っておられません。続く7節でイエスさまは言われます。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」

人には人を救うことはできません。究極、人を救えるのは神だけです。ただ神だけが、人の目から「ちり」と「梁」を取り除き、人を新しく造り変えることができます。「犬」「豚」を「人間」に再創造できるのです。だからこそ、神に期待しなければなりません。そうして神に「求め」「捜し」「たたく」のです。私たちは無力で、全く何もできないのですから、天地万物を造り、支配しておられる全能の神にただ「求め」るのです。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」(7-8)「求めなさい」は、単純に(神に)「お願いしなさい」の意味です。「捜しなさい」は、「懸命に模索しなさい、試行錯誤しなさい、努力しなさい、追求しなさい」の意味で、血眼になって解決の道を懸命に模索しろと言うのです。そして、「たたきなさい」は、怠けて花婿を迎えそこ

ない閉め出されてしまった花嫁のように、「ご主人さま。開けてください、開けてください」と門を必死にガンガン叩き続ける様子を意味します(マタイ25:11)。つまり、ここでイエスさまは、神に解決を「お願いしなさい」と言うのですが、その際、ただお願いだけしてあとは何もしないということではなく、血眼になって解決の道を懸命に模索しながら、ここぞという解決の道に向かう門を見つけたら、そこを「たたけ」と言うのです。それも一度や二度ではなく、(これらはギリシャ語の現在形なので)何度も、何度でも、しつこく、往生際悪く、恥や外聞を捨てて、ひたすら、解決するまで「求め続け」、「捜し続け」、「たたき続けよ」とイエスさまは言われるのでした。そうする者に神は応えてくださるのだと、イエスさまは約束なさいます。すなわち、「だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれる」と言うのです(8)。

これを親子に喩えて説明します。「あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。」(9-10) 人には本能というものがあります。これは、良い人悪い人の区別なく、神が人に与えた特別な才能、すなわち神の賜物です。それで、イエスさまが言われるように、確かにどんなに「悪い者ではあっても」、子どもが腹を空かせて「パンをください」と言うのに石を与えるようなことはしません。同様に、子どもが腹を空かせて「魚をください」と言うのに蛇を与えるようなことはしません。「とすれば、なおのこと」(11)、神は、私たちをこの世に生んでくださった「父」なので、今日生きるために必要な糧である「パン」を求める私たちに、食べられない「石」を与えるようなことはなさいません。「魚をください」と言うのに、食べられない「蛇」を与えるようなこともなさいません。

「天におられるあなたがたの父」(11)とイエスさまが言われるように、神は私たちの父です。それも本当の父です。どんなに立派な良い人でも、あるいは、どんなに自分を可愛がって大切に育ててくれたとしても、所詮、地上の父は仮の父に過ぎません。いつかは必ず死んでしまいます。私たちの本当の父は、天地を造られた神です。神は私たちをこの世に造られました。しかも、ただ造ったのではなく、私たちを愛して造りました。特別な価値と意味と目的を持たせて造りました。誰がどう言おうと、自分でどう思おうと、私たちは神に愛されているのです。それも父としての愛で愛されています。私たちがこれまで生きてきた生い立ちや境遇に痛みや傷や悲しみがあっても、今こうして神に生かされていることが、何よりも神に愛されている証拠です。私たちは神に愛され生かされているのです。

それで、イエスさまは続けてこう言われます。「してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすればなおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありますでしょう。」(11) ここで、イエスさまは、世の父が自分の子どもには「良い物」を与えるように、「求める」私たちに、神は「良いもの」をくださると言われます。私たちにしてみると、私たちの求めたものをそのまま神がくださればよいのではないかと思うのですが、そうではありません。神は「良いもの」をくださると言うのです。「良いもの」と聞くと、何かちょっとガッカリするような気がしますが、でも、それは何か機械的に「良いもの」と言われているわけではなく、父が子に与える「良いもの」です。つまり、我が子のことを誰よりも愛し、生まれる前から、何もかも、誰よりもよく熟知して、子どもにとって何が最善なのかをよ〜く知っておられる父が、愛する我が子のことを思って、我が子に与える「良いもの」なのです。それは、子どもが「求める」ものより、はるかに安全で、確かで、価値があり、優れて「良いもの」です。なぜなら、子どもは未熟で、愚かで、罪深いからです。自分に何が大切で、本当に必要なものかもわかっていません。よくわかっていないのに、わからないままトンチンカンなものを「求める」こととなります。でも、それでもイエスさまは、天の父に「求めよ、探せ、たたき続けよ」と言われます。愚かで、未熟で、トンチンカンでも、天の父に願ひ求めよと言うのです。なぜなら、天の父は愚かで未熟で罪深い私たちをこよなく愛しておられ、私たちが「求めるもの」以上の「良いもの」をくださるからです。

「良いもの」とは「良い賜物、貴重な贈り物」の意味です。神がくださるものは、何より貴重な賜物なのです。世界で最も価値ある、最高にすばらしい贈り物です。私たちは罪人で、愚かで、未熟な祈りしかできないのですが、それに応えて、神が恵んでくださるものは、この世で最も価値ある、すばらしい贈り物です。私たちがどんなに愚かで、未熟で、罪深く、無力でも、神は最高にすばらしい賜物を恵んでくださる、ここに私たちの安心と希望と力があります。私たちがどんなに愚かで、罪深くても、永遠の望みが、ここにあるのです。